変わる市川民話

「すがの会」制作の絵本『奉免の常盤井姫』 作・中津攸子　絵・唐沢静

天然痘であばたが出来たけれど、絵本の中では美しい姫になった

市川のグループ「すがの会」制作の絵本『奉免の常盤井姫』は、後深草天皇の皇女が、16歳のとき、天然痘にかかってしまい、皆に移してはいけないと、老女と御殿を抜け出すところから始まる。

＊

舟が着いたところは美女が崎と呼び、二人は小さな庵で暮らす。村人が食べ物を届けてくれる。姫は都を偲び、琵琶を奏でて過ごす。身にまとったうすぎぬをはずすことはない。

姫は誘われて日蓮上人の説教を聴き、やがて日国(にっこく)と名乗って尼になり、日本最初の日蓮宗の尼寺安楽寺を建てる。

幕府が全国の土地から税を取り立てるが、日国のいたところは税を免じられ、村人は、その地を奉免(ほうめ)と呼ぶようになった。姫のお逮夜には、今でも村人が安楽寺に集まり墓参りをし供養している。

＊

透き通ったうすぎぬ越しに見える絵本の姫には痘痕(あばた)などの痕跡はなく、できもんもなく、らい病の気配もない。常に美しい。画家の筆遣いも楽しい。絵本はこのような美しい本でなければならない。

しかし、村人が、すけたうすぎぬ越しの顔を見て仰天、逃げ去るという場面のある『流れついたおひめさま』では、きれいごとだけではない民話らしい雰囲気が伝えられている。

市川民話の会」が収集している。

奉免の常盤井姫」は一冊千円。。すがの会」の代表河西明子さんに連絡のこと。
047(322)8087

その1　姫はそのときでは治らない病気にかかってお顔にできもんができたんで、うばをつれて大海に出たんですって、らい病だったかもしれませんね。それで、死のうと思ったんでしょうが…。

その2　おひめさまは、うすぎぬをかぶっていらっしゃいましたが、そのすけた顔を見て村人は「あっ」と声を上げ、そのまま逃げるようにして外に飛び出したのです。

その1は、市川市奉免(ほうめ)の聞き書き、その2は市川市に伝わる民話「流れついたおひめさま」、姫のあばた顔を見た村人が驚いて逃げるところ。しかし、新しく制作された絵本では美女になって登場する。

後深草天皇の姫宮幼時よりおわずらい勝ちにて、一人の老女と関東へ下らせ給ふ。その後、日蓮上人にご対面、聖人ねんごろに加持して差し上げたるにご全快、お喜びの余り、遂に剃髪して日国と号し、村名をそのまま奉免山安楽寺と名付けられたり。法華宗門最初の尼寺なり。（安楽寺略縁起）

後深草天皇皇女
常盤井宮日国聖人開山
宗門最初の尼寺
奉免山安楽寺略縁起
市川市奉免町一二七番地
電話市川三七局一六一三番

末広クラブ・逆井漫歩137　平成21年10月